

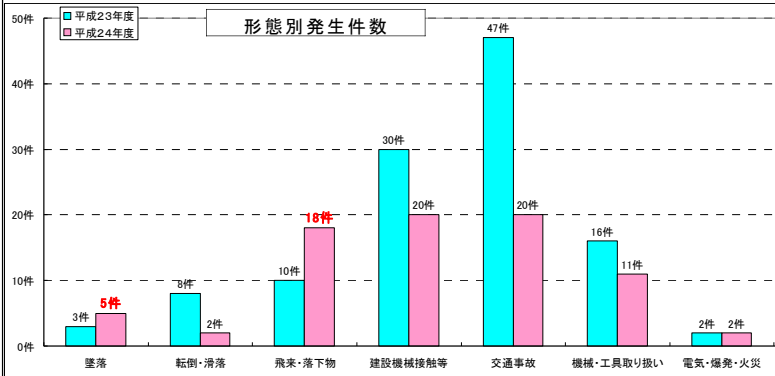
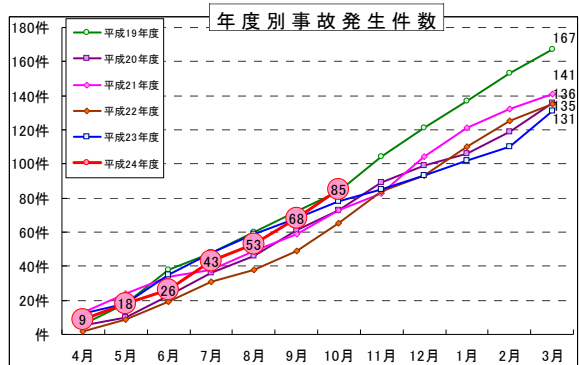
緊急事態!

## 過去最悪の状況が継続、安全教育・指導の再徹底を!!

近畿管内（直轄）における今年度の事故発生状況は、従来を大きく上回るペースになっています。

■発生件数では、10月末時点で既に過去最多の平成17年度同時期の86件に次ぐ85件（前年比約109%）が発生しています。

さらにもらい事故を含めた件数129件（前年比約112%）は、平成17年度同時期（120件）を上回る、過去最悪の状況です。



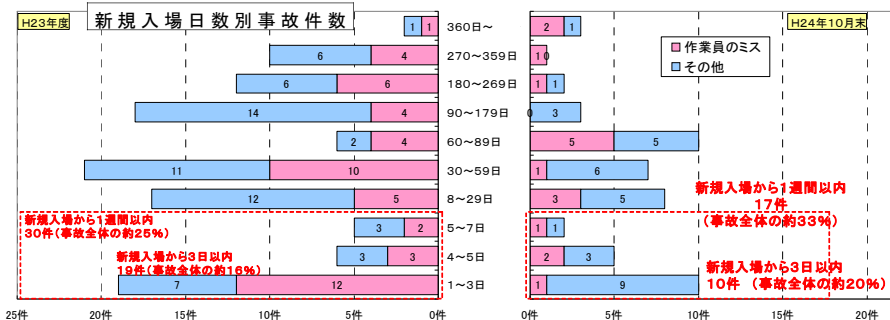
■分類別では、特に工事関係者事故が22件（前年比約146%）で過去最多になっています。従来に比べ重傷者の比率が高いのが特徴です。

■発生形態別では、飛来・落下事故及び墜落事故が既に昨年度同年の発生件数を上回り増加傾向です。また、件数では交通事故と建設機械の接触等の件数がともに20件で最多になっています。

### 新規入場日数別の傾向

■現場入場から日数の浅い作業員が生じさせた事故が多く、特に新規入場から3日以内の作業員が起した事故は、H23年度では事故全体の約16%、H24年度では約20%を占めています。

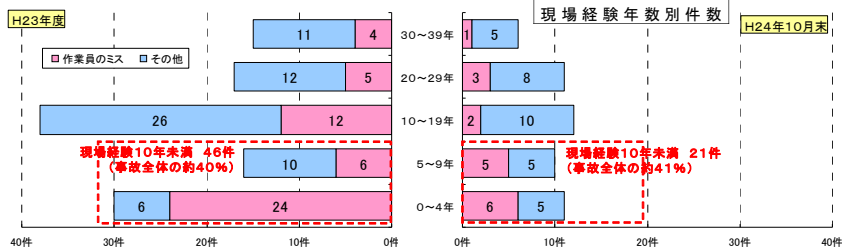
また、現場入場から日数の浅い作業員は、ミス（不注意、不安全行動等）により事故を誘発していることが多く、新規入場から1週間以内にミスにより発生した事故は、昨年度が約57%、今年度は若干減少して約23%を占めています。



### 経験年数別の傾向

■現場経験年数による比較では、経験年数が10年未満の層で発生した事故が概ね40%程度を占めている。

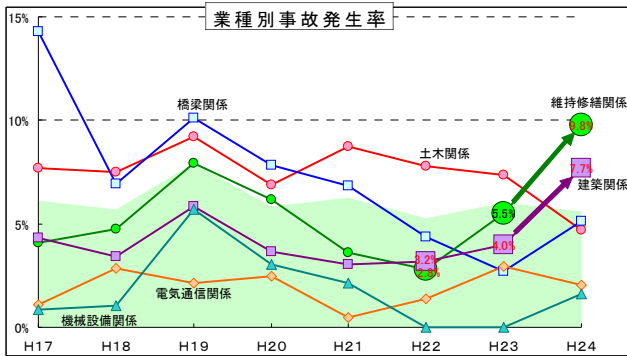
また、作業員のミスにより生じた事故の割合では、現場経験年数の高い層では30%程度ですが、経験年数が10年未満の作業員では、昨年度が約65%、今年度は若干減少して約52%を占めています。



①新規入場から3日以内、②経験年数が10年未満  
に該当する作業員に対する安全教育・指導を再徹底しましょう

(表面から続き)

## 維持修繕関係・建築関係の工事事故が増加しています



### 業種別の事故発生状況

■事故発生率を業種別で比較すると、昨年度から増加傾向であった**維持修繕関係(河川・道路)**で**5.5%→9.8%**、**建築関係**で**4.0%→7.7%**と、**昨年度の倍近い事故発生率**になっております。

発生形態では、維持修繕関係は草刈り作業時における人身・物損事故、建築関係は地下(躯体内)埋設物の損傷事故が多発しています。

**速報!**

## 吊り作業におけるバックホウの転倒事故が続発!

11月中旬にバックホウによる重量物の吊上時にバックホウが転倒する事故が続発しています。

本来バックホウは掘削機械であり、労働安全衛生規則第164条等で荷吊り作業は厳しく制限されています。しかし、移動式クレーン構造規格に規定する安全装置等を備えたクレーン機能付きバックホウが広く普及しており、現場での使用に際しては、安衛則・クレーン則等に基づく有資格者の配置や転倒・接触等の安全対策を実施しましょう。

### 事故事例① ミニバックホウの吊り降ろし時にバックホウが転倒

#### 〔事故概要〕

掘削作業のため、クレーン機能付きバックホウ(0.45m<sup>3</sup>級)でミニバックホウ(0.1m<sup>3</sup>級)を吊り降ろそうとしたところ、吊り降ろしていたバックホウがバランスを崩して転倒し、オペレーターが飛び降りた際、全治3ヶ月の負傷を負った。

#### 〔事故原因〕

詳細は調査中ですが、**最大荷重を超過**したと思われる。



### 事故事例② 資材を吊り上げ、運搬していたバックホウが転倒



#### 〔事故概要〕

トラクターのローターを吊り上げ、運搬していた小型バックホウが、バランスを崩して転倒した。

当該小型バックホウはクレーン機能が装備されていなかった。(オペレータの怪我及び物損等の実害は生じていない)

#### 〔事故原因〕

詳細は調査中ですが、**クレーン機能を有しないバックホウを目的外使用(吊り上げ・運搬作業)**したため、バランスを崩したと思われる。

## 『年末年始労働災害防止強調期間』

平成24年12月1日から1月15日までの間は、「年末年始労働災害防止強調期間(主唱:建設業労働災害防止協会)」です。年間を通じて災害の多くなる年末年始を迎えるにあたり、積極的な労働災害防止活動を展開しましょう。

(スローガン) **無事故の歳末 明るい正月**

